「経済と文化～七宝の宮殿」

●豊かさと清貧（せいひん）

今年も、新型コロナウイルスと共に、あっという間に過ぎていったように感じました。生活や文化に大きな影響を与えましたが、その背景には経済的な問題が大きいといわれます。経済的豊かさと文化的な豊かさ（幸福感）は、どのように関わるのでしょうか。

そこで私（住職）の狭い観点と個人的な関心から世の中を振り返ってみました。

経団連の第4代目会長土光敏夫氏（1896～1988）が、40年近く前、NHKの取材番組（NHK特集『85歳の執念　行革の顔·土光敏夫』、1982年7月放送）に登場しました。質素な日常生活ぶりまで紹介され、印象的だったのは、夕飯で残したメザシを「明日食べよう」という姿でした。

一方、「消費は美徳」という言葉が、1959年に流行語大賞に選ばれています。

極端ですが、どちらも私たちの生き方の選択肢でした。

●経済成長が迫る葛藤（かっとう）

イスラエルの天才歴史学者ユヴァル·ノア·ハラリ氏（1976～）は、著書『ホモ·デウス』（河出書房新社、2018年）で、現代の人間は、殆どあらゆる場面で「より多くのもの」という信条で生きていて、それはどんな立場であろうと、「経済成長」が「多くを解決すると思われている」といいます。

私には興味深いたとえ話が語られます。

ハイテクの企業で時給100ドル稼ぐソフトウェアエンジニアがいたとします。

ある日、彼女の高齢の父が脳卒中で倒れ、買物、料理、入浴まで介助が必要になります。

父を自宅に引き取り、朝の出勤時間を遅らせ、夕方早く帰宅し、自ら世話をすることもできます。収入も勤務先の生産性も下がりますが、父は自分を敬い愛する娘に面倒を見て貰えます。

一方で、彼女はメキシコ移民の介護士を時給12ドルで雇い、住み込みで父の世話をして貰えます。そうすれば、自分と勤め先はこれまで通りの仕事ができ、介護士とメキシコ経済までもが恩恵を受けます。

さあ、「このエンジニアはどうするべきなのか?」というのです。

ハラリ氏は、「経済成長は家族の絆よりも重要だろうか」と問いかけ、自由市場資本主義は、こういう「倫理的判断」を押しつけることで、もはや科学の領域ではなく、「宗教の領域」に足を踏み入れているといいます。
これは私たちにとって矛盾であり、また、大きな葛藤となりますね。私は一体、どう受けとめているのかと問われています。

●いつかでなく今

「時間節約こそ幸福への道!」
「時間節約をしてこそ未来がある!」
「きみの生活をゆたかにするために―時間を節約しよう!」

「時間どろぼう」は、人びとに時間の節約をさせ、時間貯蓄銀行に預けさせた時間で、いつかは余裕のある生活をしようと呼びかけます。

その言葉に従って、耳の聞こえない母とのおしゃべりや、セキセイインコの世話や、合唱団の練習や、車椅子生活をしている彼女に毎日花を届けるなど「無駄な時間」を預けた人たちは、どんどん不機嫌で怒りっぽくなり、街は灰色になっていきます。

そして、人びとは、今を満足する余裕や優しさという心を見失うという文学作品があります。

これは、ドイツの児童文学作家ミヒャエル·エンデ氏（1929～95）の『モモ』（岩波書店、1976年）という物語です。

エンデ氏は、時間をたとえにして、近代社会におけるお金の問題と、人間が本当に人間として生きるということ（経済と文化）を問いにしています。

何かを求めるために、何かを犠牲にして、求めたものの檻（おり）に閉ざされてしまう。そのことの堂々巡りの不条理を仏教はどう教えてくれるのでしょうか。

●七宝の牢獄という世界

『無量寿経』では、本質をそれた歩み（仏の道理を疑う）をするものは、浄土に七宝で出来たお城に生まれるけれど、そこは誰とも「いのち」の通わない（他者の「いのち」を救うことができない）牢獄であると説かれています。

何かを求めるために、今あるものを犠牲にして、それと引き換えにいつか目標を達成しようとするのは、経済原理の基本の姿です。ところが仏教は、今ここにある私のいのちの不完全さ（迷い）からの完全な脱皮と成長を「さとり」、「信心」と示し、それを目標に導いてくれます。

仏教の教えを頂くと、今の私の姿を照らし、進むべき方向が示されると聞いています。まことの幸せとは何か、私のモノの見方が問われ続けていると思いました。

親鸞聖人『正像末和讃』より
「自力諸善のひとはみな　仏智の不思議をうたがへば
自業自得の道理にて　七宝の獄にぞいりにける」
「七宝の宮殿にうまれては　五百歳のとしをへて
三宝を見聞せざるゆゑ　有情利益はさらになし」　以上『誠疑讃』
本願寺出版『浄土真宗聖典～註釈版聖典』611頁

私訳）自分の能力を正しいと思いこんでいる人は、都合を越えたいのちの連帯に生かされていることを疑っているので、自らがなした結果で、自分だけはいい目に合える誰ともいのちの通い合わない牢獄に繋がれて、長い年月、仏·法·僧とのまことの出遇いがないので、他者とのまことの出遇いもめぐまれず、衆生を救うことができません。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。